



Title	太宰治の作品像及び作家像の研究：序跋文と自作再提示を中心に
Author(s)	小田桐, ジェイク
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/81964
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (小 田 桐 ジェ イ ク (TIMOTHY, Jacob Z))	
論文題名	太宰治の作品像及び作家像の研究 —序跋文と自作再提示を中心に—
論文内容の要旨	
本研究は太宰治（1909–1948）の作品像及び作家像を書物の装幀デザインや中に収録されている序跋文、太宰の作品における自作の再提示からそのイメージの変遷を明らかにすることを目的とするものである。2部、6章という構造から成る本論の概要は以下の通りである。 第一部「書物及びパラテキスト——序跋文を中心に」は、ジュネットのパラテキスト論を参照した上で、太宰治の書物における作品像及び作家像を装幀デザインや書物内に収録されている序跋文から特徴を見出だしつつ考察する。太宰の生前に出版された書物から現在に至るまでの書物を長い期間の広い範囲で、書物という媒体を中心に、これまで注目されなかった装幀デザインや序跋文における太宰治のイメージを分析する。この第一部は4つの章から成り、次のような内容である。 第一章「作品集『愛と美について』の道程——序文と作品集の変形を中心に」では、生前の出版から近年の書物まで、太宰治の作品集である『愛と美について』（竹村書房、1939・5）の変形と序文の関係をを中心に考察する。生前では、『愛と美について』は四回出版されたが、初版以後の三冊には序文「読者に」が省略されている。また、太宰の没後に五作から成る作品集『愛と美について』の作品集としての形が瓦解したことが確認でき、序文「読者に」は長い間作品集と共に提示されなかった。その理由は作品集それ自体や書簡等の資料では必ずしもはっきりとはしないが、本章では序文が作品群と共に示されているか否かが与えられるイメージと大きく関わることを明らかにする。 第二章「作品集『思ひ出』の無題序文——自己宣伝の機能を中心に」では、太宰の生前に出版された作品集『思ひ出』（人文書院、1940・6）に収録される六つの無題序文と作品の提示を中心に考察する。この作品集は単独出版ではなく、シリーズの一部であることの意味をまず明らかにする。太宰の作品集を含めて、このシリーズには15冊の作品集があり、それらの作品集の無題序文の有無を確認し、その内容を太宰の場合と比較し、「自己宣伝」の役割を考察する。更に、この六つの無題序文が今日に至るまでどのように提示されてきたのかを分析する。現在、これらの無題序文は個人全集や随筆集に収録され、「随想」として提示される例が散見される。本章では、作品集『思ひ出』に収録された無題序文の初版本にのみ見られる姿を確認し、その無題序文の道程と自己宣伝という役割を考察する。 第三章「変貌する太宰治『津軽』——パラテキストの観点から」では、戦争中に出版された長篇『津軽』（小山書店、1944・11）の初版本から近年の出版、また英訳された版まで多くの版を取り上げ、それらの書物における変貌する姿を論考する。特に注目するのは『津軽』のジャンルの変化、また書物と作家像との関係である。初版本で『津軽』は小山書店の「新風土記叢書」の第7巻として出版されていたが、戦後、前田出版社版では「長篇小説」として再提示され、更に太宰治没後に改めて小山書店の「新風土記叢書」として出版された。これらの流れを踏まえ、先行研究や評論などの言説における『津軽』という作品像、また太宰治の作家像が作品とどのように関係しているのかを詳細に論考する。 第四章「『人間失格』序跋文における解釈の提示——日本語版と英訳版の二側面から」では、太宰の代表作『人間失格』（筑摩書房、1948・7）を書物という媒体として取り上げ、日本語版と英訳版に収録されている序跋文を分析することで作家像及び作品像がどのように提示されるのかを考察する。初出雑誌における『人間失格』の姿をまず確認し、その媒体を経て単行本に収録されることでよりアクセスしやすい作品になることを分析する。その道程を踏まえ、新潮文庫版と英訳版の『人間失格』に収録されている奥野健男「解説」とドナルド・キーン「翻訳者による序文」を検討し、作品像及び作家像がそれぞれの媒体ではどのように提示されるのかを考察する。その内容	

を踏まえ、日本語版と英訳版に見出せる太宰像や『人間失格』像を比較し、序跋文は作品を読む人へどのような影響を与えるのかを詳細に論考する。

第二部「自作引用及び自作言及の役割」は、太宰治の作品における自作の扱い方を考察するものである。特に、自作が言及、あるいは部分的に引用された際に、どのように使われていたのか、またその際に生じる意味を分析する。本論で詳細に考察するように、太宰治の全作品で最も使いまわされたのは初期作品『思ひ出』（『海豹』、1933・4、6、7）である。初出雑誌での連載を経て、第一作品集『晩年』（砂子屋書房、1936・6）での収録、随筆『「晩年」に就いて』（『文筆』1938・2）での言及、作品集『思ひ出』での収録及び表題作としての位置、『津軽』での部分的な引用など、様々な場で提示された『思ひ出』のいわゆる足跡は重要な意味を持っていることを考察する。章の内容は次のようになっている。

第五章「初期作品『思ひ出』の際提示——作家による事後の自作への言及の機能をめぐって」では自作への言及を中心に、『思ひ出』という作品が太宰治の他の作品においてどのように再提示されていたのかを取り上げて分析する。従来の引用論を踏まえ、『思ひ出』が随筆をはじめ、後の作品などの多くの場で言及されたことはどのように原作と関係するのかを論考する。『東京八景』（『文学会』1941・1）で『思ひ出』が「遺書」として提示されていたことを中心に論じることで、長い間作品像及び作家像がどのように読まれてきたのかを詳細に分析し、先行研究や評論における作家イメージをも取り上げ、詳細に論考する。

第六章「『津軽』における『思ひ出』の引用とその効果」では、第三章で考察している太宰治の長篇『津軽』において、初期作品『思ひ出』がどのように自作として部分的に引用されているのかを分析する。『津軽』の語り手「私」がどのように『思ひ出』を取り上げ、どの部分を引用し、またその引用部の前後にどのような説明文があるのかに注目する。従来の先行研究や評論では、『津軽』作中に引用されている『思ひ出』が、生身の作家である太宰治に重ねられて読まれてきたが、この章では原作の『思ひ出』と『津軽』の中に再提示されている『思ひ出』の差を詳細に論考する。

以上、6章において、太宰の書物におけるパラテキスト的要素、また自作が後に言及されたり、部分的に引用されたりすることで、太宰治の作品像及び作家像がどのように変遷してきたのかを考察する。また、「終章」では本論で研究した内容はどのようにパラテキスト研究やメディア研究、引用論に更なる貢献を果たすのかを考察する。特に、本研究で使用しているパラテキスト論や引用論が太宰治以外の作家や作品にも応用性があり、新たに日本近代文学の多くの作家を見直すことができると期待している。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (小 田 桐 ジェイク)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学 准教授 斎藤 理生
	副 査 大阪大学 教授 飯倉 洋一
	副 査 大阪大学 教授 滝川 幸司
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 太宰治の作品像及び作家像の研究
—序跋文と自作再提示を中心に—

学位申請者 小田 翔 ジェイク

論文審査担当者

主査	大阪大学准教授	斎藤 理生
副査	大阪大学教授	飯倉 洋一
副査	大阪大学教授	滝川 幸司

【論文内容の要旨】

本論文は、太宰治の作品像及び作家像がどのように変遷してきたのかを、書物に付された序文や解説、さらに作品相互の関係を中心に分析したものである。太宰治は戦中戦後に活躍した作家として広く知られているばかりではなく、現在も高い人気を誇り、研究も非常に盛んである。その中で本論は、個別の作品の内容を掘り下げるのではなく、作品の周辺（いわゆるパラテキスト）が与える効果や、自作の紹介または引用によって元の作品がどのように改変されるのかという点の考察に傾注している点に特色がある。

約 13 万字の分量を持つ本論は、二部六章で構成されている。

第一部「書物及びパラテキスト—序跋文を中心に」では、書物の出版形態や装丁や構成、特に序文と解説が太宰治の作家像と作品像にどのような影響を与えたのかを考察している。

第一章「作品集『愛と美について』の道程—序文と作品集の変形を中心に」では、『愛と美について』という作品集が 1939 年に出版されて以来、生前に再版され、さらに没後今日まで様々な形で刊行され続ける中で、最初に付された作家の手による序文の提示方法が変化したことを検証し、序文の有無が作品及び作家の捉え方に与えた影響を探っている。

第二章「作品集『思ひ出』の無題序文—自己宣伝の機能を中心に」では、『思ひ出』という短篇集が、人文書院という出版社のシリーズ企画の一冊であったことを確かめると共に、各作品の前に無題の序文が置かれていることの意義を追究している。

第三章「変貌する太宰治『津軽』—パラテキストの観点から」では、太宰の代表作の一つである『津軽』の初版本から現在の文庫本まで、様々な形状で刊行されていること、その書物の形状の変化が読みに与える影響を、英語版まで含めて考察している。

第四章「『人間失格』序跋文における解釈の提示—日本語版と英訳版の二側面から」では、やはり代表作である『人間失格』の日本語版と英語版とに収録されている解説を比較することで、作家像及び作品像の差異を考察し、日本語版では作家と作品とを結びつけるように誘導する力が強いことを明らかにしている。

第二部「自作引用及び自作言及の役割」では、太宰治の作品において、太宰自身の作品がどのように引用され、改変されているのかについて考察している。

第五章「初期作品『思ひ出』の再提示—作家による事後の自作への言及の機能をめぐって」では、『思ひ出』という 1933 年に発表した作品を、太宰がその後複数の作品で再利用しているさまを検証している。特に 1941 年に発表された『東京八景』という作品で「遺書」と位置づけられたことが、その後の作家像・作品像に大きな影響を与えたことを論証している。

第六章「『津峰』における『思ひ出』の引用とその効果」では、1944 年発表の『津峰』において『思ひ出』の一部が引用される中で、元の作品とは異なる文脈を与えられていることを論じている。

終章「まとめと展望」では、以上の章で明らかにした内容を振り返ると共に、パラテキストに着目した太宰治研究の可能性を主張している。

【論文審査の結果の要旨】

本論の画期的な点は、序文や解説、作家自身の自作への言及や引用といった、作品本文以外の周辺的な要素が作家像、作品像に少なからぬ影響を与えるという、自明とも思われる問題に改めて注意を喚起したところにある。

作家だけでなく作家像、作品だけではなく作品像を考察するというアプローチは、近年他の日本近代文学作家においてもなされつつある。本論でも、作家が自作を〈リパッケージ〉する効果はもちろん、序文や解説が読者に及ぼす力を重視したこと、生前の書物だけではなく、没後現在に至る数多くの書物を検証したこと、日本語のみならず英語版にも注目したことなどは高く評価される。

一方で、上記の他の作家研究での論の蓄積が参照されておらず、太宰という一人の作家のみについての考察に留まり、ここで明らかにされた内容が太宰に限られた話なのか、他の作家にも指摘できることなのかという区別が不明瞭で、研究の意義が位置づけ難くなっている点是否定できない。第一部で取り上げている序文や解説が、作家像はともかく、作品像にどの程度の影響を与えるのかについて、一つ一つ作品に対する十分な考察がないことは、このアプローチがどの程度の有効性を持つのかという疑問を小さくないものになっている。第二部の引用や自作言及についても同様である。自作の引用に着目することが、従来の作品解釈をどう更新するのか、同じようなことをしている大正期以来の多くの私小説作家及び作品とどのように差異化されるのかが明確ではない。さらに、書物やシリーズを扱ったとき、出版社や編集者がどの程度関与したのかという問題も、具体的に検証し難い面もあるだろうが、ほとんど手つかずになったという問題も残る。

とはいえ、外国語版の書物における提示の特徴を検討したり、同時代において特定のシリーズとして発行されていた書物の中の一冊として作家と作品を見直す視線を提示したりしたことは、研究の更なる発展を予感させるものであり、今後、申請者以外の研究者の参画も期待できる、研究の新たな地平を切り開いた面があることは間違いない。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。